



# ダンジョンシーカー 4

ALPHA POLIS L I G H T

サカモト666

*Sakamoto666*



アルファライト文庫 



## ジョン=ブルグ

Bランク級冒険者  
選抜試験に参加する  
快楽殺人犯。

## ジュディ

Bランク級冒険者  
選抜試験の試験官。  
Sランク級の腕を持つ猛者。

## シャルナート

赤髪の美少女。その正体は  
炎龍皇バルフナート、  
地龍皇シャルリングスが  
同化した龍種。

## 武田順平

異世界に飛ばされた青年。  
『狭間の迷宮』から一時離脱し、  
外の世界でステータス上げに励む。

## 原田良一

『狭間の迷宮』  
深層攻略組の一人。  
見た目はホスト風。

## 中林義彦

順平を『狭間の迷宮』に  
突き落とした  
不良グループの一人。

## 坂口亜美

Bランク級冒険者選抜試験に  
参加した日本人。  
職業は盗賊。

## 武田順平

 (擬態)使用Ver.)

目立たないよう  
スキル【擬態】で変装した順平。  
金髪蒼眼の駆け出し冒険者風。

プロローグ 龍と龍 ▼▼▼▼▼

「なあ、お主……?」

Bランク級冒険者選抜試験で武田順平たけだじゅんぺいが出会った赤髪の少女は、彼を見るなり唐突に告げた。

「ここに至るまでに何回、生と死を繰り返しておるのじゃ? 因果いんががこじれて……もはや修復不可能になっておるぞ?」

少女の言葉を受け、順平の頭に鋭い痛みが走る。

「……生と死を……繰り返して……? どういう事……だ?」

そしてその場に跪ひざまずいた。

鈍い痛みにぶに耐えながら、脳内に響いた機械的音声のアナウンスを再度反芻はんすうする。

——榊原和也の殺害及び、龍種との邂逅、そして核心に迫る発言により、シソーラス値が70低下。

シソーラス値が0となりました。

再封印と引き換えにスキル解禁。また、一部の記憶を解禁します。

エクストリームスキル【取捨選択】が解禁となりました。

以降、任意で装填したスキルを捨てる事が可能になります。

その内容が意味する事を順平は頭の中で一つずつ噛み砕いていく。

今まで、順平はスキルスロットに限りがあるため、すなわちスキルを捨てられないため、有用と思えるスキルでも一切取ってこなかった。

端的に言うなら、どうやら【取捨選択】というスキルのおかげで、これからは任意にスキルを捨てる事が可能になるらしい。

つてか、それつて……と、その意味に順平は戦慄する。

殺した相手か、あるいは無力化した相手からスキルを奪いたい放題で、不要になれば捨て放題という事だ。

まさに究極としか形容の出来ない代物だろう。

が、今はそれどころではなかった。

ともかくにも頭痛が……酷いのだ。

いや、頭痛だけではない。

頭の奥に、熱い何かを感じる。

——それはそうだろう。

決して忘れてはいけない事、いや、忘れるはずのない事……それがエクストリームスキルの解放とともに再度、無理矢理封印されたのだから。

脳細胞は悲鳴を上げ、魂が軋み上がる。

今、順平を襲っているもの……それは何かを思い出そうと、けれど思い出せない、そんな感覚。昨晚の夕食を思い出そうとして何故かなかなか思い出せない——そんな不思議な気分。

迫りくる頭痛で脂汗塗れの順平の表情を見た少女は、小首を傾げてこう呟いた。

「ふむ……」

赤髪の少女——シャルナートは、解せぬ……といった風に親指の爪を噛み始めた。

「当初は、無理矢理の蘇生、そして迷宮探索の再開……そのようなものと思っていたが……どうやら違うようじゃな」

「……………」

「お主の体は正真正正の生者……実際に……蘇生魔法を使われた形跡はない」  
 シャルナートは金色の瞳を見開き、ニタリと口元を歪めた。

「いや……なるほど。これはこれは……なかなかどうして……」

彼女は何か可笑しいのか、腹を抱えて笑い始めた。

「クフフフッ！ ウフッ！ クフフフフフフフッ！ クハハハハハッ！ これは傑作じゃ……っ！ 神の業でも迷宮深層の業でもなく……これはただの……人同士の業……っ！」

更に笑い、シャルナートは続ける。

「——たったそれだけでここまでの残酷を強いるとは……クハハッ！ クハハハハハッ！ たったそれだけじゃろか！」

そして彼女は大きく頷き踵を返してこう言った。

「……いや、それが故に……お主のようなものがあるが故に、人は前に進む事が出来るのかもしれないの。と、まあ、そういう事で……ここいらでお暇しようかのう」

「……どういう……事なんだよ？」

「どうもこうも……わらわはお主と……いや、お主を取り巻く環境と、関わり合いになりたくないのじゃ」

シャルナートは後ろ手を振りながら言う。

「わらわが求めるのは安穩。そして平穩。何が悲しゅうて、我に無害な迷宮の探索者と関わらねばならんのじゃ……じゃあの」

そのまま少女は歩き去り、冒険者ギルドの中庭から消えた。



——数日後。

上空二千米ートル。

草原、森林、街、そして湖——物凄い勢いで眼下の景色が流れていく。

金色の龍と、その龍の背に乗った赤髪の少女。

地龍皇シャルリングスと、そして炎龍皇バルフナート。

先日まで二人は同化して、金色の瞳に灼炎の赤髪を持つ美しい少女——シャルナートとなっていたが、今現在では同化の法を解いていた。

「久しぶりの人間界……食文化はなかなか進化していたね。チョコレートドーナッツ……」

あれは本当に美味しかった」

赤髪の少女バルフナートが言うと、金色の龍がその目をぎよろりと背後の少女に向けてる。

「わらわは人間の姿は取れぬ。一人で何日も喰い歩きよってからに……」

「あれ？ シャルリングスにも甘味のお土産をたくさん買ってきたじゃないか」

「……わらわとおぬしとはサイズが違う。ドーナッツ三十個程度で満足できる道理はどこにもないわ」

「あらら。これは悪い事をしちゃったかな……」

と、少女はそこで空の彼方の更に先——天空を見上げて億劫そうに呟いた。

「……それにしてもあの少年。まったく……あそこまで胸糞の悪い呪いを見たのは初めてだよ。ねえ、シャルリングス？」

その言葉に、金色の龍もまた不機嫌そうに呟いた。

「で……結局、あれはなんなのじゃ？ いや……これで良かったのか？ バルフナートよ？」

「放置しておいてって事？」

「そうじゃ。軽く一合か二合か拳を交えただけで、ロクに言葉も交わさず……我らはあの場を立ち去った。確かにあの少年は現時点では、わらわ達の脅威にはなりえないが……そ

れでもスキルハンターの卵じゃろう？」

「その件なら放っておいてかまわないよ。アレは無害だから  
しばしの沈黙。」

そして龍が口を開いた。

「無害……とな？」

「うん。アレは無害……解説しようか？」

「解説は……待ってもらいたい」

「ん？ 待つ？ どうして？」

「分析はお主の専売特許である事は分かるし、それは認める。お主の思考に、散々苦汁を舐めさせられたわらわが言うのじゃ。間違いない」

「こちらは詰将棋をしていたはずなのに、いつの間にか盤をまるごと力業でひっくり返してしまふ貴方に、それは言われたくないけどね」

「まあ、それは良い。実際にお主はたったあれだけのやりとりで全てを理解したのじゃろう？」

「全てではないよ？ 自信を持って読み切ったと断言できるのは九十八パーセントくらいのものさ」

「それなら全てと言っても差し支えはないんじゃないよ。とはいえ、わらわもまた最古の龍に

数えられる一柱。一から十まで教えてもらおうというのも好かぬ。わらわの考えを述べてもよからうか？」

再度の沈黙。

プワリと龍はその翼を大きく羽ばたかせ、そして上昇する。

「なるほど。であれば貴方の考えを聞いたほうが良いね……うーん……私から貴方に質問をする形式のほうが良い？」

「そうしよう」

「ねえ、シャルリングス？ 貴方は……どう思う？」

しばしのタメの後、龍はこう口を開いた。

「それは彼にかけられた呪いという事か？」

「うん。そうだね」

「わらわは、アレの呪いを、死亡と同時に蘇生する不死の能力であると思っていた。それも……本人が無自覚であるタイプのな」

うんと少女は頷いた。

「思っていた……という事は、それは過去形なんだよね？」

「うむ」

「じゃあ、今はどう思っているの？」

訪れる静寂。せいじやく。

しばしの沈黙の後、龍はゆっくりと口を開いた。

「死に戻り……ではないのか？」

クスリと少女は笑った。

「本当に驚いた、シャルリングスがあれだけの情報でそこまで辿り着くなんて」

「じゃから言うておろうが、馬鹿にするでないぞ？ わらわはこれでも最古の龍じゃ」

クツクと金色の龍は満足げに笑う。

更に赤髪の少女から「驚いた」という言葉をもらった事が余程嬉しかったのか、龍は何度も目を細めながら首を上下させて頷いた。

「まあ、それはそれとして……惜しいね。不正解だよ」

と、そこで龍は絶句し、しばし固まった。

「なんじゃと……？ わらわは相当……自信があったのじゃぞ？」

「死に戻りではない。これは断言できる」

「それは何故なのじゃ？」

「彼の魂を取り巻く因果——死に戻りでは、あそこまではこじれない」

その言葉を受け、龍は押し黙る。  
やがて悔しげに声を振り絞った。

「なるほどの……お主がそういうのであれば、確かにそうかもしらん」  
しかしだとしたら……と龍は少女に尋ねた。

「アレは何なのじゃ？」

今度は少女が押し黙り、しばらく後、右手の人さし指を一本だけ立てた。

自らの頭の中を整理するように、あるいは再確認するように指先を指挿棒に見立てて振る。

そして頷き、こう口を開いた。

「アレは……いや、アレもまた……神や、あるいはかつての迷宮最深部の攻略組の長がそうであったように……時の囚人となっている」

「ふむ？ 時の囚人とな？ 見たところ十代半ばの少年にしか見えなんだが……時の囚人とは長きを生きる者のはず……」

「事実として、彼は十代半ばだよ？ でも、実際の彼は——」  
と、そこで空を行く龍は乱気流に突入した。

猛烈な風に煽られるが、少女は何事もないうように澄まし顔で言葉が続けていく。

「彼は——彼の歩んで——道は——そのものに経験を刻む——だから——普通の人間でも——攻略——唯一の道——既に——彼——気の遠——回数——」

やがて龍は乱気流を抜ける。

少女の言葉を受け、龍は何とも言えない表情を作った。

「なるほど。それは……それは……壮絶にして凄惨な……なるほど」

龍と少女は同時に深く溜息をつく。そして幾度目か分からない無言が二人を支配した。どれほどの時間が経過したのだろうか、ようやく空中のドライブを終えた二人の視界に、棲み処である古代樹の森が見えてくる。

と、少女は思い出したようにパンと掌を鳴らした。

「ああ、そういえば。彼の地の迷宮で思い出した」

「何をじゃ？」

「空間の歪み」

ああ、その事か……と龍は不快さを声に含ませる。

「確かに……空間の歪みが無視できぬレベルになっておるの」

「恐らくは迷宮深域の連中が、本格的に最終階層に挑もうとしている」

「浸食が……始まるのかの？ 先ほどのギルド試験でも、わらわ達に絡もうとした奴がおったの？」

「うん」

「聞くまでもない事じゃが……追ってきておる事には気付いておるか？」

「私を舐めすぎ。で……彼もまた、物理演算法則に介入できるみたい」

「お主もわらわを舐めすぎじゃ。そもそも物理演算法則に介入できねば深層域では通用せぬ。で……当方の勝率は？」

少女はまた押し黙り、やがて再び右手の人さし指を一本だけ立てる。

自らの頭の中を整理するように、あるいは再確認するように指先を再度、指揮棒に見立てて振るう。

そして頷き、しばしのタメの後に口を開いた。

と同時に、風が吹きつける。

「——%」

「迷宮最深部……か。なるほどの……」

「……どこで迎撃する？ 流石に私達の寢床まで案内はしたくない」

「ならば、ここらで地上に降りるか？」

「うん、そうしよう」

「しかし浸食——現界と狭間の世界を繋げる……か」

そして天を見上げて龍は言葉を続けた。

「——これは荒れるのう」

## 第一章 スキルハント ▼▼▼▼▼

時を戻し、Bランク級冒険者選抜試験、二次試験直後。

——突如として順平の前に現れ、そして嵐のように去っていった赤髪の少女。

彼女の過ぎ去った方向を眺めながら、順平は独りごちた。

「龍種って……一体全体、何なんだよ……あのロリババアは……」

気付けば頭痛は嘘のように消え去っていた。

「それにしても……」

記憶の一部解禁……か。

先ほど、脳内に流れたアナウンスの意味を考える。

普通に考えれば、そのままの意味で何か重要な事を思い出すという事なのだろうが……

「うーん……何の事だかサッパリ分からない」

そう。一部の記憶の復活と言われても、今のところ実感できる事が何一つない。

何も思い出した事はない。

例えば……と順平は思案する。

かつて高校時代に五百から千くらいの英単語を覚えた事があったとして。いつの間にか忘れ去っていたそれら英単語を、何かのタイミングで思い出したからと言って、「あの単語を思い出した！ やっべー！ 俺すげえ！」となるだろうか。

恐らくは否だ。

つまり、何かを思い出した可能性はあるが、具体的にそれが何かが分からないという事だ。

……まあ、おいおい分かるだろう。

溜息とともに順平はそう思い、思考を次の案件に切り替える。

——エクストリームスキル【トランシユポグニス取捨選択】。

これを得た事で、装填したスキルを自由に捨てる事が可能になった。

今まで順平は迷宮の中でも外でも、魔物か人間かを問わずにいろいろなスキル持ちを殺してきた。

そして、そのたびにいろいろなスキルカードを見てきた。

例えば迷宮内で出会ったSランク冒険者の集団のスキルも、普通であれば喉から手が出るほどに欲しくなるものばかりだった。

・ 竜人化（達人級）—— 防御力を瞬間的に四倍にブースト

・ 剣術（達人級）—— 後の先を極めた程度

・ 神の守護（達人級）—— 防御力と攻撃力を戦闘時に一・五倍にするパッシブスキル

だが、あの地獄迷宮は、正攻法ではとても攻略できない。ましてやもともとのステータスがゴミなんだから、まともなスキル構成でスキルスロットを消費すれば……それこそジ・エンドだった。だから諦めて捨ておいてきたのだ。

しかし、取捨選択が出来るのであれば、話はまったく異なる。

これまで捨ててきたスキルの事は悔やまれるが……それはまあ良い。過ぎ去った事を考えても仕方がない。

己が有利な状況になったのであれば、それを如何に利用するかが肝要だ。

何しろ順平は数か月もすれば再度、絶望の迷宮に放り込まれる身の上なのだ。

——外の世界でも有用なスキルを所持している者は幾らでもいる。

例えば、Sランク級冒険者。あるいは、魔王級の魔物。

ぶっちゃけた話……と順平はほくそ笑んだ。

——どいつもこいつも笑ってしまうような雑魚ばかりだ。

であれば、スキルの乱獲も可能。

とつとと上級職に乗り換え、残された時間はスキル奪取に勤しもうと……順平は口元を歪める。

辛いスキルハントの能力も向上し、殺さずとも無力化するだけでスキルカードの出現条件が満たされるようになった。

前回の件から考えると、ポッコポコにした後に縄で雁字搦めにしさえすればスキルの奪取は可能そうだ。

ならば、私利私欲の殺生だと心に無駄なダメージを追う事もない。まあ、それでも下衆には成り下がりはたくはない。

通常スキルと言えば、途方もない訓練や努力の結果で得られる貴重なものだ。

例えば、剣一筋に生きてきた剣聖から「はい、ごつつあんです」とばかりに剣術のスキルを奪うのはやはり心が痛むものだ。

だから順平は、スキルを奪う相手の選別だけは行うつもりだった。

都合の良い事に、この世界には基本的にクズしかない。

「となると……乱獲状態になつちまうかもな。まあ、どうあれ俺には都合が良い」

眩いた後、順平は呆れるように笑った。

「まさか、ゴミばかりのこの世界に感謝する日がくるとはな」

とはいえ……と順平は思う。

龍種の少女が残っていた「生と死の繰り返し」というフレーズ。

そして、脳内に響いた一部記憶の復活というアナウンス。

分らない事だらけである状況はあまり変わっていない。

それはともかく、と気持ちを切り替え、順平は大きく頷いた。

「少なくとも、エクストリームスキルを得た事で状況は間違いなく激変している。こんなスキルを得てしまったら……外の世界では本当にやりたい放題だ。数か月後にはSランク

級冒険者が束になつてかかってくるけど、俺には敵わねえんじゃないか？」

順平は軽く息をつくど、先ほどまで座っていた木陰に戻った。

木に背をあずけるように腰を掛け、その場に横倒しになつたままだった紙袋を手取る。

そして袋から取り出したサンドイッチの残りを頬張るべく、口を大きく広げ――

――しかし首を軽く左右に振った。

腹は減っているが、どうにも食欲が湧かない。

まあ、瞬く間にいろんな事があつたので、それもやむなしか……

そんな風に思った矢先、妙に陽気な声がかかった。

「おー！ 美味しそうなサンドイッチじゃん？」

順平と同年代。ハーフパンツにタンクトップという露出の多い格好の黒髪ショートカット。

「……ああ、実際に美味しい。元の世界に居た時のちゃんとしたパン屋には及ばないけど……それでもコンビニ並みにはイケる」

整えた眉毛と、ほんのり薄化粧。貴族階級と娼婦を除けば、この世界ではそれなりに垢ぬけた身だしなみだ。

「え!? マジで?」

二次試験で出会った、順平達とは別ルートでの日本からの転移者――坂口亜美は、コン

ビニ並みという言葉に反応して間の抜けた声を出した。

「ああ、マジだが？」

「あなた、コンビニと一緒って言ったら……そりゃあこの世界では奇跡的な事なのよ？」

まあ、そりゃあそうだろうと順平も思う。

日本でテーブルに無造作に置かれる胡椒や一味唐辛子が、この世界では同量の黄金と取引される。

そんな世界において、コンビニレベルで美味しいという形容は、事実上、最高級の絶賛に近い。

「まあ、今俺の泊まっている宿屋の女将さんの飯は、実際に奇跡的なレベルで美味しいかな」

「ふーん……」

物欲しそうな目で亜美は口を開いた。

「で、どうして、あなたはさっき、それだけ美味しいサンドイッチを食べようとして……袋にしまおうとしたのかな？ お腹一杯なの？」

「ああ、腹が一杯というか食欲がない。だから、実際に今から、袋にしまおう」

「いや、その流れだと『じゃあ、食べかけで良ければ食うか？』とか、そういう感じになるのが自然じゃない？」

眉をへの字に曲げ、亜美は膨れっ面を作った。

その顔を見て、順平はクスリと笑った。

「じゃあ、食べかけで良ければ食うか？」

サンドイッチを紙袋にしまい、そのまま亜美に差し出す。

猛烈な速度で首を上下に振って、亜美は紙袋を受け取った。

そしてそのまま袋を開け、亜美は嬉しそうにサンドイッチを頬張った。

「ってか、本当に俺の食いかけなんだが……躊躇なくいったなオイ。食い意地張ってたんだな……」

呆れ顔の順平に、亜美は親指を立て太陽のような笑みを浮かべた。

「この世界でそんなしょうもない事気にしたら、とても生きていけないよ……ってか、これ……本当に美味しいね」

「だから言ってるんだろ、女将さんの飯はマジで美味しいって」

「なるほど。それじゃあ、今度、私を宿に連れて行きなさい。是非とも他の料理も食べてみたい」

「あ……事前に言っておけばメシだけでも提供してくれるだろうけど、俺の泊まっている宿は結構高いぞ？」

「そこはまあ……」と、はにかみながら亜美は言った。



「男が女に奢<sup>おご</sup>るるのは、当然の事じゃない？」

順平は思わず苦笑してしまふ。

「オーケー。無事に二人とも合格できたら、祝いもかねて連れてってやるよ」

「え？ 冗談で言ったんだけど……そもそも奢<sup>おご</sup>ってもらう理由が何もないし」

驚いた表情を見せる亜美に対し、順平は肩をすくめた。

「じゃあ止めておくか？」

ぶんぶんと亜美は首を左右に振った。

「いや、貰<sup>もら</sup>えるもんはゴミでも貰<sup>もら</sup>えつつのがこの世界に来てからの私の信条だから！」

そんな亜美の表情を順平はマジマジと眺めた。

「ところでさ……」

「ん？ 何？」

「お前……化粧変えたりしてねーよな？」

「どこにそんな時間があるって言うのよ？」

「まあ、そりゃあそうなんだが……」

次の瞬間、順平は思わず——無意識に妙な言葉を口走ってしまふ。

「あのさ……お前さ……そんなに綺麗だったっけ？」

もともと、亜美の顔立ちは整っている。

美人と言えば美人なのは間違いないのだが……初対面の際、順平が抱いた感想はその程度だった。

「……と順平は思う。何故だか、今は彼女が絶世の美女に見えるのだ。」

ひよっとすると【擬態】や【魅了】のスキルの類かとも思ったが、この状況でそれは有りえないだろう。

昼食の前後で変わりがあるとすれば、龍種との邂逅、エクストリームスキルの取得、そして記憶の一部解放。

——記憶の一部解放？

順平の頭の中で何かが引つかかるが——しかしその何かに辿りつけず順平は舌打ちする。対する亜美の反応と言えば、目を大きく見開き、頬を真っ赤に染めているというものだった。

——とんだ失言だ。どうして俺はあんな事を口走った。不味ったな……

順平はそう思うも、続く言葉が出てこない。

「……」

「……」

頬を林檎の如く染めあげて、亜美は呆れるように言った。

「……何言ってるのあんた？」

順平は頭をポリポリと指先で搔く。

「いや、気にするな」

「いや、気にするよ？」

「……いや、だから今の発言は忘れてくれ」

「……いや、だから今の発言は忘れないよ？」

首を左右に振りながら、順平は苦い表情を浮かべる。

「失言だ。少し前にショッキンクな出来事があつてな……ちよつとばかり精神の均衡を逸していた部分があるんだ」

誤魔化すように順平は立ち上がった。

「じゃあ、昼休憩もボチボチ終わる頃合いだし……行くか？」  
うんと頷き、亜美も立ち上がる。

「……何故に手を握る？」

「これでも私……結構、積極的なタイプなんだよ？」

意地悪く笑うと、亜美はこごとばかりにギョッと強く順平の手を握りしめた。

「……お願いだから、さっきの発言は気にしないでくれ」

やれやれとばかりに順平は肩をすくめ、亜美の手を振りほどいた。

「三次試験の開始時刻は明朝六時。期間は数日間を予定しているから、各々必要と思われる準備を事前においておいて頂戴。っていう事で、一時解散♪」

試験官であるジュデイの鼻につく甘ったるい声。  
その言葉を受け、一同は舌打ちとともに解散となった。

昼休憩が開けたと思えばこれだ。ともかくにも、この試験は全てにおいてタイムスケジュールが直前まで分からない。彼らが舌打ちするのも当然だった。

今回も、「数日間」と期間が指定されているが、具体的に何日かは分からない。従って、多くの者は何が起きても良いようにと、水と食料、そして替えの下着類等の買い出しに向かった。

というよりも、それをしない者は余程の豪胆ごうたんというか馬鹿というか……ちなみに、そういった者が一名だけ存在している。

順平である。

彼はそもそも迷宮内で数か月、あるいは数年単位でも生きられるだけの備蓄びちくをアイテムボックスに収納していた。そのため、食料を買い漁る必要もない。

とはいえやる事もないので、街をぶらりと練ねり歩き、気に入った香辛料や調味料の類たぐいと生活雑貨を数点購入しようと決めていた。

「カレーパウダーでもあれば一番助かるんだがなア……」

サバイバル関係の精通者曰く、半ば腐ったような肉でもカレーパウダーさえかけてしまえば、衛生面は別として、吐くか吐かないかという意味では何とか食えるらしい。

だが、たかが胡椒こしょうやトウガラシでさえもとんでもない値段の世界だ。

「まあ……迷宮に戻される前に、もう一度クズどもを大量に狩るなりしてどこかで荒稼あらかまぎするか。確かに香辛料は……まともな食生活のためには大事だよな」

街歩きに熱中し、気付けば数時間経過していたらしい。

空一面が淡あわい朱色しゆいろに染まり、夕刻となっていた。

そこで順平は街の大通りを歩き、一軒の小汚い酒場に入った。

「これで葡萄酒と……何か適当に摘つまむものを見繕みとつてくれ」

小銭を何枚かカウンターに差し出した。

するとスキンヘッドのマスターは無言で傾かき小銭を回収する。

そのまま順平は店の奥まで進み、二人掛けのテーブルに腰を落ち着かせた。

と、続いて新たな客が店に入ってきた。

「私はラム酒をリンゴジュースで割ったカクテル……後は干し肉とチーズとパンをお願いするわ」

甲高い声でそう告げた少女は、小銭を数枚カウンターに置く。

そしてそのまま店の奥まで進み、順平の対面にゆっくり座った。

「……相席を許した記憶はねーんだがな？」

順平の横に座ったのは二次試験で順平と出会った少女——亜美だった。

「相席を禁止された記憶もないんだけど？」

悪戯っぽく少女が笑い、順平は溜息をついた。

「良いじゃん別に減るもんでもなし。ゴハンは一人よりも二人で食べたほうが美味しいよ？」

「……本当に面倒な奴に絡まれたもんだな」

「旅は道連れ世は情けって奴よね」

「ここは日本じゃねーからな。誰に対しても優しくない異世界だ。情けをかけた奴から付け込まれて骨までしゃぶられる」

ピシヤリと言いつ放ち、順平はあつちに行けとばかりに右手で亜美にジェスチャーをした。

「まったく……取り付く鳥もない男ね」

「取り付かせる気がないからな」

「はいはい。それじゃあ、とりあえず別の話をしようか？」

「人の話をまったく聞いてねーな、オイ」

順平が呆れて微笑む。

すると亜美はニンマリと笑みを浮かべた。

「はい、アウトっ！ 笑ったよねあんな！」

そう言っただけを指さす亜美に対し、順平は舌打ちをした。

確かにこちらの意をまったく無視する亜美のペースに、つい僅かに口元が緩んでしまった。

「笑ったからってなんだよ？」

「笑ったんだったら責任取って一緒にゴハン食べなさいっ！」

「何の責任なんだよ……」

「会話と笑顔が一番のゴハンの調味料なんだよ？」

屈託なく笑う亜美に、再度順平は深い溜息をついた。

そして、やれやれとばかりに肩をすくめる。

「オーケイ、分かった……お前には負けたよ」

最強のスキルハンター相手に、舌戦では盗賊が勝利を収めたようだ。

「へへ、やったねっ！」

「飯食うだけだぞ？ 食ったら俺はとつと帰るからな？」

酒場の女性従業員が順平と亜美のドリンクをテーブルに運んでくる。

「それじゃあ乾杯」

亜美の言葉に順平は頷き追従した。

「うん、乾杯……って、一杯だけだからな？ 俺はとつと帰るからな？」

一杯飲んでしまえば止まらないというのは、古今東西、酒好きにありがちな現象だ。

というか、たまたま入ったにしては店が良すぎた。

料理のことごとくが酒を飲ませるための濃い味付けで、憎たらしい事に美味しい。

コンビニの唐揚げレベルの揚げ物もあれば、そのまんまポテトチップスみたいなものも出てきた。

流石にポテトチップスが出てきた際は、亜美も順平も互いに奪い合うかのような猛烈な勢いで食べに食べた。

肴が美味ければ、必然的に酒は進む。

そして酒が進めば料理も追加する。

料理がくれば酒が足りなくなり、酒を頼めば料理が足りなくなる。

最終的には腹がパンパンになるまでいくか、あるいは吐くまでいくか——

——つまり、順平が今現在置かれている状況は……泥沼である。

まあ、その気になれば順平には【全状態異常耐性】のスキルがある。

従って、アルコール程度の毒性ならいつでもシラフに戻るのだが、楽しい酒の席でそんな事をするほど無粋ではない。

とりとめの話話は止まらなかった。

地球人から見た異世界の異常性。あるいは純粹に地球での心配事や悩み事。

互いのプライベートに入り込みすぎない程度の当たり障りのない話が、冗談混じりに交わされる。

本戸翔太と、その取り巻きは論外として……この世界に放り込まれてから初めて、順平がまともに話をした同郷出身者だ。

あるいはそれは自分の境遇を少しでも分かってくれる理解者とも言え換えられた。

酒の力もあったのは間違いないが、純粹にこの場の居心地が良かった……というのが長居の最大の理由だろう。

しかしそんな心地好さを阻むような怒声が、順平達の背後で響いた。

「ああん？ Aランク級冒険者である……ユーリカ様にケンカ売ってえのか？」  
見れば、二メートルを超える大男がウイスキーと思われる蒸留酒をジ、ヨ、ツキで呷っていた。

「すみません、すみません」

女性従業員は平謝りの姿勢だが、大男は追撃の手を緩めない。

「お前は今、俺に料理の皿を手渡したよな？」

「……はい」

「そして、お前は手渡し損ねて、料理をテーブルにぶちまけた。いや、それどころか……テーブルの下、俺のズボンにまでぶちまけやがった！」

「しかしそれはお客様が……失礼ですが、酔いすぎて受け取り損ねたように、いや、あるいは、わざとのように私には見えませんでした……」

「ああ!? おい、舐めてんのかおめえはよ!? 俺様に口答えとはとんでもねえメスブタだっ！ おい、マスター!?!」

カウンター内で調理をしていたマスターは、恐る恐る大男に問いかける。

「……はっ、はいっ……何でしょうか？」

「この女を一晚借りるぜ？ Aランク級冒険者に不逞を働いた罪を……体にキツチ教え込ませてやるからよ？」

だが、精一杯の勇氣をもってマスターは大男にこう言った。

「すみません、ウチはそういう店じゃないんで……。お代は結構ですから、ここいらでお引き取り——」

「アアン？ お前も俺に喧嘩を売ってえのかっ!?!」

スキルでも使っているのだろうか、その大声には威圧と悪意がたっぷり乗せられていた。心臓の弱い者であれば、聞いただけで心臓が止まるような、臓腑の奥に響くような、不快な重低音。

マスターはしばし何かを考え……そして諦めたように首を左右に振った。

「ウチはそういう店ではありません。しかし自由恋愛を止める事は私には出来ません……後はウチの従業員と貴方様が決める事です」

それを聞いた大男が、へへっと下卑た笑みを浮かべた。

女性従業員は涙を浮かべ、周囲を見渡して常連客達に助けを求める。

が、誰しもが彼女と視線を合わせないよう目を伏せていた。

それはそうだろう、相手はAランク級冒険者であり、下手をすれば司法機関にも顔が利く。

強姦未遂を衛兵に訴えたところで、聞く耳を持たないばかりか、事実無根の名誉棄損で逆にお縄にかかる可能性すらある。

「事実、今回の事案が許されるかどうかはともかく、Aランク級冒険者には一部治外法権レベルの特権が与えられていた。

彼らの狩る魔物が仮にも野放しにされていたとしたら、年間に幾つあるいは幾十の村落、地方都市が壊滅の憂き目に遭ってもおかしくないからだ。

だからこそ国家権力にも顔が利くし、こうして我が物顔が出来るのだ。

周囲の客達は悔しげな表情を浮かべながらも次々と店を後にする。

逆らえば何をされるか分からないし、何よりデコピン一発で失神させられてしまう程の力の持ち主なのだ。であれば、ただちにその場を去るのが賢明な判断だった。

順平もそう思い、亜美に言葉を投げかける。

「……そろそろ出ようか？」

急に真面目な表情を浮かべ、張りつめた雰囲気たぐよを漂わせた順平に、亜美は驚いたように尋ねる。

「さつきまで……酔ってみたいな感じだったけど……演技だったの？」

「いや」と順平は首を左右に振った。

「これはスキルだ。多少の毒じゃ俺には効かない。アルコールの酩酊程度ならその気になれば一瞬で治せる」

「そりゃあまた便利な事で……」

やや呆れ気味の表情を亜美は浮かべた。

「で……お前もスキルか？ カクテル十杯近く飲んでいたはずだが……シラフにしか見えねーぞ？」

「両親が九州出身だからね……カクテルの十杯じゃあ、ほろ酔い程度……かな？」

「それはそれでとんでもねえな……」

「まあ、ウチの父親、ウイスキーの瓶二日で空ける人だったからさ」

「……肝臓壊すぞ？」

順平の言葉に、亜美は遠い目をしながら何とも言えない表情を作った。

「今思い出すと、肝硬変かんこうへん一步手前って感じだったんじゃないかしら。もしも日本に帰れるなら、こっちの世界の魔法薬を持って帰ってあげたいんだけど……」

「……そうか」

それはさておき……と順平は口を開いた。

「さつきと出よう」

「うん……明日の試験前にトラブルに巻き込まれたくないしね」

「それじゃあ、今日はここで解散——」

だがそこでAランク級冒険者の大男がご機嫌な口調でこちらに声をかけてきた。

「おお？ その可愛い子ちゃんは……異世界出身か？」

## 立ち読みサンプル はここまで